『無者キリスト』を読む　（新宿集会にて）

第五転「変貌」（ヘルモン）
――第一部　キリストの実存十転――

２０２４年1月28日
弘野慶次郎

キリストの特殊な現象　第五転　変貌（ヘルモン）　エクソードス（出現世）　聖書は大ドラマ
自我からの解放　復活の予表　大希望の実体　啓示の神

●キリストの特殊な現象

皆さん、お早うございます。今日は小池辰雄の『無者キリスト』の107頁「変貌」という所を学びたいと思います。私は月に一回とか、二か月に一遍こちらに寄せてもらっていますけれども、皆さんと共に神を讃美するということだけで、私は喜びで来ているということです。私は他の教会とかにも顔を出すけれども、主にある者は同じなんです。ツーカーでその人たちと心が通い合うけれども、それは皆さんが同じ主を讃美しておられるから、その讃美しておられる所に行くと、自分も高められて神を讃美したくなる、喜びを共にしたいということで、私は他の教会なんかにも顔を出している。この日本キリスト召団というものを小池辰雄が作りましたけれども、そこだけではなくて、どこへ行っても、

「主は同じ、御霊は一つ、主は一つ」

というパウロの言葉もありますように、どこへ行っても神を讃美しているということは非常に共通の喜びとして私は感じます。

キリストの所へ行ったときには、「どこの出身か?」なんて絶対に問われることはない。どこの出身でも――この地上では仕方がないんですね、ある程度。カトリックとか、プロテスタントとかあったり、いろいろとありますけれども――やはり「主は一つ」で、天国へ行くと、決して「どこ出身か?」ということは絶対に言わない。本当に主を讃美している人だけが主キリストの所に集まって抱(いだ)かれるという、それが本当の天国ではないかなと私は思っている。

この「変貌」という所は、キリストの特殊な現象のことが福音書に出ている。キリストは大体、対人(ひと)、人に対して語りかけておられるけれども、ここの所だけは対人ではなく、特殊な位置にあるのではないかと思う。それを小池辰雄は「変貌」という所でわざわざ取り上げている。この変貌というのは、どこの教会でもあまり言わないかも知れない。キリストは人に対して語って、人に対して何か奇跡を行ったりしておられるけれども、ここだけは――弟子を連れて行かれたけれども――旧約時代の預言者たちと語られているという

ことで、ちょっと特殊な位置にあると思う。小池が数頁にわたって書いていて、ここから学ぶものはかなり深いものがあると思います。

ここの所は、ルカでもマタイでもマルコでも――ヨハネ伝以外は――書かれている記事です。マタイ伝では17章、ルカ伝では9章、マルコ伝では9章に書かれてるけれども、ここでは、「サタンよ退け！」と「エクソードス（出現世）」という所で一連のことが書かれている。イエスが弟子たちを連れて先ず、

「あなたは私のことを何と言うか？」

と、弟子たちに聞かれている所から始まって、ペテロがキリストを否むところがあります。それから、変貌の所に入っていくという流れになっています。

●第五転　変貌（ヘルモン）

《サタンよ退け！

イエスが弟子たちを伴れてピリポ・カイザリヤの地方を歩いていたとき、ペテロがイエスの問に対して、

「あなたはキリスト（メシヤ）、活ける神の子であられる」

と告白したことは、彼がみたまのひらめきを受けたからであった（マタイ16・16、17）。しかしそのあとで、イエスが十字架の受難の告示をなさると、ペテロは

「主よ、それはいけません」

と言った。このときペテロは全く十字架に躓いた。みたまのひらめきは消えていた。イエスはそこで厳然と告げた。

「サタンよ、わが後に退け！　おまえは私の躓物だ。おまえは神のことを思わず、反って人のことを思っている」（マタイ16・23）

と。ペテロはこのとき「サタン」とまで言われて叱責された。全く人間は天国と地獄、天使と悪魔の両面をもっている。

ペテロのこの天国性と地獄性の分裂、光と闇、霊と肉、義と罪の二面性は、万人に共通の危機性である。そこでイエスは弟子たちにキッパリと語った。

「もし私につき従うとするならば、自分を棄て、自分の十字架を負ってついて来なさい。自分の生命を救おうと思う者は、生命を失い、私のため自分の生命を失う者は却って生命を得る。ひとは全世界を獲得しても、自分の生命を失ったら、何になるか。またその生命を何で贖い得られよう」（マタイ16・24～26、私訳）

要するに棄身でかかる人間は、生命賭けでぶつかる人は、本当の生命を得る。》

この「サタンよ、退け！」という凄い言葉がここにある。イエスが弟子たちに、

「世間は私を何と言っているか。世間は何と私のことを言っているか？」

と問い、そしてそのあとに、

「それなら、お前たちは私を何と言うか？」

という問いをする。そうすると、ペテロが、

「あなたこそキリスト、活ける神の子である」

と告白する。弟子たちは、ピリポにしたって、イエスに従っているのに、「イエスは神の子である」と認識していることが非常に薄い。この時だけはペテロが、

「あなたこそは活ける神のキリストです」

と宣言するけれども、弟子たちは実際は分っていない。だから、その時にイエスが、

「これは天の父が直接、お前に御霊の光で閃いて、そう言わせたんだよ」

ということを言う。その所があるけれども分っていない人が多くて、ピリポだって後で、

「父を示してください」

とか言っているでしょ。全然分っていないんですね、弟子たちは。ところが、分っている人たちはかなり居ったように思う。言葉としては残ってないけれども。もう一人、

「あなたは活ける神の子キリストです」

と言ったのは、ペテロ以外にはマルタの言葉として残っています。

「あなたは神の子メシヤである」

と、マルタもそういう言葉を語っています。その他にも、「汚れた霊」「ニコデモ」「アリマタヤのヨセフ」「百卒長」「マグダラのマリヤ」「ヤイロの父」という人たちも半分くらいは「これはキリストだ」ということを分っていたけれども、正確に「あなたは神の子である」と告白したのはペテロとマルタです。けれども、これは決して自分から出たのではなくて、天の父の神の閃きによって直接教えられて初めて分かるということです。我々も決して御霊によってでしか、神さまのことは分からない。それをちゃんと書いてくれているのがパウロです。コリント第一の手紙2章6節に書いてある。

「御霊に、その啓示によらなければ、我々は神さまのことは分からない」

ということをパウロは書いている。

「6されど我らは成人したる者の中にて知恵を語る。これ此の世の知恵にあらず、又この世の廃らんとする司たちの知恵にあらず、7我らは奥義を解きて神の知恵を語る、即ち隠れたる知恵にして、神われらの光栄のために、世の創の先より預じめ定め給いしものなり。8この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば栄光の主を十字架に釘けざりしならん。9録して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』と有るが如し。10されど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。11それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、斯くのごとく

神のことは神の御霊のほかに知る者なし。12我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり、是われらに神の賜いしものを知らんためなり。13又われら之を語るに人の知恵の教うる言を用いず、御霊の教うる言を用う、即ち霊の事に霊の言を当つるなり。14性来のままなる人は神の御霊のことを受けず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁うべき者なるが故なり。15されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるる事なし。16誰か主の心を知りて主を教うる者あらんや。然れど我らはキリストの心を有てり。」（コリント前2・6～16）

ここでパウロは、

「御霊の啓示によらなかったら、神さまのことは全然分からない」

ということを言っている。だから、我々、ここで集まっている者は、やはり神さまの霊の啓示をある程度受けているんです。「イエスがキリストである」ということも全部知っている。ところが、とことん知ろうと思ったら、これはやはり祈りによって我々の心を開いてもらわないと、分からない。パウロが

「目から鱗のようなものが落ちた」

という経験をしてますけれども、彼は神さまの事態はよく分っているんですよ、神さまのことは分っている。けれども、我々の自我というものがそれを見えなくさせている。その霧みたいなものを神さまによって晴らしてもらわないと、神さまのことが分からないんです。ここでも、

「自然の人には、神さまの霊に属することは分からない」

と書いている。生まれつきの人は、神さまのことは全然分からない。神さまによってこの霧を晴らしてもらわないと、神さまの事態が全く分からないということをパウロがしっかりと言っている。パウロも宣教はしたけれども、決して人から教えてもらっていない。

「神さまの御霊によって初めて啓示されて、そのことだけを語っていますよ」

ということを言っている。翻ってこの小池辰雄を見てみますと、小池は十字架によって贖われたという物凄い体験をしているから、全部見えてきたんです。それをこの『無者キリスト』に書いてくれている。ですから、この御霊の力によらないと、私たちは神さまのことは一切分からない。ここに、

「霊は一切のことを神の深みまで究めます」

と書いている。だから、神さまのイエスの御霊によらなかったら、我々は本当に何も神さまのことは分からないということを、ここでパウロは強調してくれている。

「御霊をバカにしたらダメですよ」

ということを、キリストも言ってますけれども、ここでもパウロがそれを繰り返して言っ

ている。本当に自然の人は御霊のことを知ろうとはしていない。

「御霊によって教えてもらわなかったら、一切が分からない。神の深みまで絶対に分からない」

と言っている。ペテロが直接、神さまの閃きによって、

「あなたこそ活ける神の子です」

と言ったけれども、これは一瞬的な閃きであって、その後そのことをすぐ忘れてしまう。福音書の記事に書いてあるけれども、イエスが

「自分は受難を受けて、殺されて三日目に甦りますよ」

と言った時にペテロが、

「それはいけません」

と言って、「ペテロは全く十字架に躓いた」と小池は書いてます。御霊の閃きが消えていたということです。

「自分は受難を受けて殺されて三日目に甦る」

ということを言っているけれども、ペテロには、「死ぬ」ことだけが頭にある。それだけがグサリときて、「復活」ということまで頭に入っていない。ですから、キリストのこの神さまの道を妨げるものはサタンと一緒だということで、イエスは一番愛しているような弟子ペテロに対して、

「サタンよ！」

という強い言葉で言っている。これは物凄く恐ろしいことですよ。我々もキリストから「お前はサタンだ！」とか言われたら、とんでもないことですね。

荒野の試みの所で「サタンとの一騎討ち」ということもありますけれども、その時も、

「サタンよ、去れ！」

と言って、非常に厳しい言葉でイエスはサタンを退けています。それと同じくらいに、

「サタンよ、わが後に退け！　お前は私の躓きものだ。お前は神のことを思わないで、かえって人のことを思っている」

と。我々は実際はみんなそうなんですよ、人のことしか思っていない。神さまのことを思うというのは、瞬間的には思うけれども、大抵は人のことを思っている。人の基準で判断してやっている。この時もペテロは本当に

「イエスに死んでもらっては困る」

というようなこともあったんでしょうね。もう死なれたら、たちまちペテロにしてみたら、

「どうしてよいか分からない」

という思いで言った。我々の日常生活で生きているときは、ペテロと同じなんですよ。神さまのことを思わないで人のことを思っている。人の基準で私たちはいつも生きている。だから、

「お前は神のことを思わず、かえって人のことを思っている」とはっきりと言われている。そして、

「ペテロはこのとき「サタン」とまで言われて叱責された。」

と、小池辰雄は書いてます。これは物凄く恐ろしい言葉ですよ。私たちはキリストから

「お前はサタンだ！」

とか言われたら、とんでもないことですよね。

「全く人間は天国と地獄、天使と悪魔の両面をもっている。」

と。我々は常にこの二つを持っている。「今日は凄くよかった」とか思う日もあるでしょうけれども、もうそれが消えてしまうと、人間的な価値ですべてを判断していくというのが我々の性なんですね。

「ペテロのこの天国性と地獄性の分裂、光と闇、霊と肉、義と罪の二面性は、万人に共通の危機性である。」

ということをはっきりと小池辰雄は言ってます。我々の性は全部そうなんです。そのあとでキリストはこういうことを言われる。

「もし私につき従うとするならば、自分を棄て、自分の十字架を負ってついて来なさい。自分の生命を救おうと思う者は、生命を失い、私のため自分の生命を失う者は却って生命を得る。ひとは全世界を獲得しても、自分の生命を失ったら、何になるか。またその生命を何で贖い得られよう」

と。これは聖書に書いてある通りを小池辰雄流に訳して書いている。

「要するに棄身でかかる人間は、生命賭けでぶつかる人は、本当の生命を得る。」

けれども、私たちは「命がけでぶつかっていく」というのは物凄く恐ろしいことです。

「命をかけてまでキリストについていく」

という、この厳しい言い方を弟子たちも聞いている。我々も聖書から学んだら、そういう厳しいことを言われている。小池辰雄も、

「要するに棄身でかかる人間は、生命賭けでぶつかる人は、本当の生命を得る。」

と書いているけれども、我々はこういうように「生命賭けでぶつかる」ということはできないんですよ。絶対にそういうことはできない。

これが「天国と地獄」というふうに書いているように、「万人が持っている危機性」です。決して自分の力で「生命賭け」なんてできない。これはキリストの生命を懸けられた、それをもって我々のところに語りかけられて初めて「生命賭け」という言葉が生きてくるんですね。

パウロは生命賭けで伝道していきました。物凄いですよ、パウロの活躍というのは。本当にパウロこそ生命賭けで伝えて行ったけれども、それはパウロが言っているように、

「キリストの愛が私を駆り立てているんだ」

と。キリストの愛に駆り立てられなかったら、我々は絶対にそういう生命賭けで伝道するということはあり得ないことです。我々は弱いです、ペテロと一緒です。パウロがあれだけ生命賭けで伝道したというところには、キリストの愛が迫って迫って仕方がないから、どうしても「そうせざるを得なかった」ということです。小池辰雄も、

「せざるを得ないというのが本当の世界だ」

と言っている。それは我々が神さまからちょっと離れたら、「生命賭け」なんてとんでもないことです。パウロから学ぶことは非常に多いけれども、小池がここまで書いてくれているということは、小池はもう本当に十字架によって贖われた存在であったから、これだけのことが言える。そうでなかったら、我々はとてもそこまでは行くことができない、そういう存在なんですね、我々は。

●エクソードス（出現世）

その次に、この「変貌」という本質に入っていく。今の「サタンよ退け！」は、福音書にこういう順序で書いてあるから、ここで小池辰雄もそれをやっている。そして、こういう「サタンよ退け！」ということがあった一週間ほど後にこの変貌が起こっている。それが聖書に記載されているということで、その本質の所に入っていきます。

《エクソードス（出現世）

すなわちイエスは十字架道を語ってから、一週間を経たころ親しい弟子たち、すなわちペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネの三名だけを伴れて人寰（じんかん）を遠ざかり、高い山に登っていった。高い山というのは多分ヘルモン山であろうと謂（い）われている。勿論二七五九メートルもある四時白雪をいただいている高峯まで登るわけはないので、ある程度の高み、それも峠のような地点に登ったのであろう。

それは何のためか。特別な祈りのためであった。イエスは今や正にガリラヤ地方の伝道を終え、不日（ふじつ）、エルサレムに向って南下せんとする時点、伝道生涯の峠、カイザリヤ・ピリポで語った通り、自ら十字架への道にのぼらんとの終末的な峠にさしかかっておられたからである。

この高山のある峠の地点、森に囲まれたところと推察されるが、そこでイエスは深い祈りに入った。すると見よ、顔容（かんばせ）が日の如く輝いてきた。衣裳も白光（びゃっこう）を放つに至った。更に驚いたことには、イエスの傍らに二人の人が霊光を浴びて現われるではないか。それはモーセとエリヤ！　旧約の世界の最も霊的な預言者たちである。そしてイエスと語りはじめた。内容はエルサレムにおけるイエスの現世からの脱出、すなわち出現世（エクソードス）のことである。筆者ルカはここにイエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマを「エクソードス」と表現したものと思う。すなわちこの現世を立ち出でるという意味であると思うから、「出現世」と訳した。「逝去」とか、「最後」とかい

う現行訳がなされているが、それでは「おしまい」であって、イエスの旺(さか)んなる霊生をどうしてくれるかと申したい。》

いよいよ変貌が始まるけれども、ここで三人の弟子たちがついて行く。ヤコブ、ヨハネ、ペテロの三人はいつもイエスが連れて行きます。この三人もこういう変貌の所を体験している。体験しているにもかかわらず、神さまのことが全然分っていない。オロオロするばっかりなんです。イエスはやはりこの三人には見せておきたいという思いがあったんでしょうね。それでこの三人をつれて山に入られたということです。

「三名だけを伴れて人寰(じんかん)を遠ざかり、高い山に登っていった。……それは何のためか。

特別な祈りのためであった」

と。これはルカだけ「特別の祈りのため」と書いている。他の記事では「祈りのため」とは書いてない。小池辰雄は「何のためか、特別な祈りのため」ということをわざわざここで書いています。特別な祈りです。

キリスト・イエスにとって「祈り」ということはどういうことかというと、

「本当に大きな「父なる神の懐の中に入っている」

ことが祈りなんです。イエスにとってそれが祈りです。我々にとっては、祈る時は神さまと物凄い距離がある。神さまに向かって距離があって祈っている。ところが、イエスの祈りというのは、本当に父の懐の中に入った祈りですから、神さまとイエスの間には全く距離がない。ちょうどそれは赤ん坊が母親に抱かれている時と同じような感じです。赤ん坊にとって母親と自分とは一つですよ。もう隔たりが全然ない。「お母ちゃん」と言ったら、それは自分と母親とは同一というように感じているのが赤ちゃんです。それと同じような形でイエスは父の懐の中で安らって、その中で祈るということが「特別の祈り」ということです。そして特別の祈りをしていると、

「顔容(かんばせ)が日の如く輝いてきた。衣裳も白光(びゃっこう)を放つに至った」

と書いてある。これはここの所だけなんですよ、キリストがこんなふうに輝いた姿は。その他の姿は、キリストは惨めな姿でしょ、全部惨めなんです。十字架の所でも非常に惨めです。だけど、十字架に至るその直前に、キリストが弟子たち三人を連れて、変貌していく姿を見せる。この変貌の姿は、黙示録の所にも書いてある。それとそっくりだと私は思う。黙示録1章の12節から読んでみましょう。

「12**われ振り反りて我に語る声を見んとし、振り反り見れば七つの金の燈台あり。13また燈台の間に人の子のごとき者ありて、足まで垂(た)るる衣を著(き)、胸に金の帯を束(つか)ね、14その頭(かしら)と頭髪(かみのけ)とは白き毛のごとく雪のごとく白く、その目は焔(ほのお)のごとく、15その足は爐(ろ)にて焼きたる輝ける真鍮(しんちゅう)のごとく、その声は衆(おおく)の水の声のごとし。16その右の手に七つの星を持ち、その口より両刃(もろは)の利き剣(つるぎ)いで、その顔は烈しく照る日のごとし。17我これを見しとき其の足下(あしもと)に倒**

れて死にたる者の如くなれり。彼その右の手を我に按きて言いたもう『懼るな、我は最先なり、最後なり、18活ける者なり、われ曾て死にたりしが、視よ、世々限りなく生く。また死と陰府との鍵を有てり。19されば汝が見しことと今あることと、後に成らんとする事とを録せ、20即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈台との奥義なり。七つの星は七つの教会の使にして、七つの燈台は七つの教会なり。』」（黙示録1・12～20）

私はこの黙示録を見ても、よく分からないです。「七つの何々」と書いてあるけれども、そのことは分からない。ここに、

「燭台の中央には、人の子のような方がおり、足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた。その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、目はまるで燃え盛る炎、足は炉で精錬されたしんちゅうのように輝き、声は大水のとどろきのようであった。右の手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出て、顔は強く照り輝く太陽のようであった。」（黙示録1・13～16、新共同訳）

と書いてある。ここでも小池辰雄は、

「顔容が日の如く輝いてきた。衣裳も白光を放つに至った」

と。これはイエスが十字架で復活されて、ヨハネが御霊に感じて、イエスと出会っているんですけれども、まだイエスが十字架にかかる前に、まだ生きておられる時に、こういうふうに変化しているという姿を弟子たち三人が見ている。それとこの黙示録のここに出てくるキリストの姿とそっくりなんです。こういうものが本来のキリストの姿の一部を顕している。我々が見ているキリストというのは物凄く人間なんですね。そういう鋭い本当に輝く姿というのは、もうここの所でしかないんです。大抵は惨めな姿でしょ、キリストは。十字架にかかって、雑巾みたいにされていますよね。そして死んでいきます。あの中に神さまが居られるとは誰も思わなかった。一部の人が

「あ、これこそ本当の救主だ」

ということを感じた人はいたけれど、ほとんどの人はその惨めな姿に神の姿は見てない。ここの所だけが物凄い変貌された凄いキリストの輝ける姿が見えているという所なんです。

「そこでイエスは深い祈りに入った。

深い祈りに入られたんですね。深い祈りに入ったからこそ、

すると見よ、顔容が日の如く輝いてきた。衣裳も白光を放つに至った。」

ということで、物凄い輝けるイエスの姿がここに現れた。ここにも、

「伝道生涯の峠……自ら十字架への道にのぼらんとの終末的な峠にさしかかった」

時に変貌が現れているんだということを小池辰雄は強調してくれています。

「そこでイエスは深い祈りに入った。すると見よ、顔容が日の如く輝いてきた。衣裳も

白光（びゃっこう）を放つに至った。更に驚いたことには、イエスの傍らに二人の人が霊光を浴びて現われるではないか。それはモーセとエリヤ！　旧約の世界の最も霊的な預言者たちである。そしてイエスと語りはじめた。」

これは凄いですよね。なんでこれが「モーセとエリヤ」だったかというのは分からないけれども。そう名乗ったわけではないけれども、瞬間的にこれが「モーセとエリヤ」ということが弟子たちにも分ったんだと思う。「その人たちはモーセですよ、エリヤですよ」と言わなくても、これは霊的に分かるんです。不思議なもんですね。

●聖書は大ドラマ

「内容はエルサレムにおけるイエスの現世からの脱出、すなわち出現世（エクソードス）のことである。筆者ルカはここにイエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマを「エクソードス」と表現したものと思う。」

と書いてあるように、ルカだけがこういうことを書いている。

「すなわちこの現世を立ち出でるという意味であると思うから、「出現世」と訳した。「逝去」とか、「最後」とかいう現行訳がなされているが、それでは「おしまい」であって、イエスの旺（さか）んなる霊生をどうしてくれるかと申したい。」

と。小池はここで凄く憤慨したような表現をしています。

「イエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマ」

という。これは本当に「大ドラマ」なんですよ。小池辰雄はよく、

「聖書は大ドラマである」

と言うけれども、これこそ大ドラマなんです。キリストが誕生されたでしょ。人々に対して奇跡を行われて、最後には十字架の道を辿って行かれるわけです。そして、死んだと思ったら、三日目に復活されたでしょ。そしてまた昇天されて、

「また今度、来ますよ」

というような約束までしておられる。これは神さまのドラマですよ。だから、

「これは神さまの大ドラマである」

と小池は言うんです。

「神さまのなされる大ドラマを我々は見させてもらっている。神さまの大ドラマは我々と無関係ではない。神さまの大ドラマの中に我々も含まれて入れられているんですよ」

ということを言っている。ただ大ドラマを映画を見ているように感じて見るのではない。

「その大ドラマの中に我々も含まれている。この大ドラマの中に我々も招き入れられている」

ということをここで言っている。

「このイエスの旺んなる霊生をどうしてくれるかと申したい。」

というように書いてくれてますように凄いことなんですよ。受難を受けて死んで復活して昇天されたというので、もうとんでもない我々の想像を絶することです。だから、「これは大ドラマだ」ということを言っている。「これでお終い」ということであったら、我々の信仰は空しくなります。パウロが、

「復活がなかったら、本当に我々ほど惨めなものはない」

と言っているでしょ。それと同じで、この大ドラマが復活というところまでこないと、我々にとっては、信仰は空しいものになる。この地上だけのことであれば、これは本当に意味がない。やっぱり「復活した」ということだからこそ、非常に大ドラマなんです。

この「エクソードス」「出現世」ということを小池辰雄は書いているけれども、『神約聖書略解』という所を読んだら、やはり同じようなことが書いてある。このことは別に小池だけが言っていることではない。伝統的にこういう解釈があったんだろうと思います。しかし、小池はこの「おしまい」で終ってしまったら困るから、このことを強調してくれている。

「このイエスの旺んなる霊生をどうしてくれるかと申したい。」

と書いているように、

「これは物凄い大事な現実ですよ、リアリティですよ」

ということを言ってくれている。

●自我からの解放

《十字架の贖罪死を突破して彼は復活し、昇天することが出現世であり文字通りの大往生である。モーセとエリヤはその事態に衷心よりの崇敬の念を以て語っていたに相違ない。イエスにとって、モーセとエリヤの出現は正にお出迎え、歓迎の予表であったのである。天界の預言者たちの二代表が、イエスに深い信愛の情を以て敬意を表しに来たのである。十字架の受難の死をイエスから聞き及んでは、モーセもエリヤも絶言の思いであったであろうが、復活、昇天のイエスの旺盛なる霊生をイエスから承り、讃嘆の意を表したであろう。》

これは小池辰雄の思いなんです。こういうことは聖書には書いてない。

「十字架の贖罪死を突破して」

という。「突破」という言葉が好きですね。「贖罪死」ですから、「死を突破した」ということです。贖罪死で、我々の自我を本当に解放してもらったんです。私自身は、「十字架とは何か」というと、本当に

「自我からの解放」

だと思っている。あまり「罪」とかいうことはよく分からないけれども、

「自我から解放された」

という喜びは、私は本当に言葉をいくら尽くしても言い尽くせないほどです。「自我から解放された」ということが

「十字架の贖罪死」

ということなんです。この「十字架の贖罪死」で、「自我から解放された」という喜びがあって、私はこうして喜んで生きているということなんです。

「十字架の贖罪死を突破して彼は復活し、昇天することが出現世であり文字通りの大往生である。」

と書いてます。「往生」という言葉は仏教の言葉ですけれども、小池はこの「往生」という言葉が好きです。

「往って生きる」

というようなことを言っている。だから、「大往生」と言っている。凄いことですよ、これは何遍も言いますように、死んだ者が復活して昇天して、また我々のところに来てくださるわけでしょ。そういうことを小池は体験しているものだから、本当にこれを言わないではいられないような感じですね。

「モーセとエリヤはその事態に衷心（ちゅうしん）よりの崇敬（すうけい）の念を以て語っていたに相違ない。」

これは小池辰雄の思いです。聖書に書いてないことです。

「エリヤもモーセも本当に心の底からイエスのことを崇敬（すうけい）の念を以て語っていたに相違ない」

と。その内容まで聖書には書いてないけれども、本当にその通りだと思います。

「イエスにとって、モーセとエリヤの出現は正にお出迎え、歓迎の予表であったのである。」

という。

「これから十字架にかかりますよ」

ということを、モーセとエリヤはキリストから聞いたのか、もう分っていたのか、そんなことはわかりませんけれども、このモーセとエリヤの出現は正にお出迎え、歓迎――これから受難をするということの歓迎――の予表であったろうということですね。

「天界の預言者たちの二代表が、イエスに深い信愛の情を以て敬意を表しに来たのである。」

本当に信頼してこの預言者二人が現れたのであろうということを書いてます。深い信愛の情を以てモーセとエリヤが本当に敬意を表しに来たのであろうと。

「十字架の受難の死をイエスから聞き及んでは、モーセもエリヤも絶言の思いであったであろう」

本当にそうですよね、モーセもエリヤも、「十字架にイエスがかかる」というようなことを――知っているか知らないか、そんなことはよく分りませんけれども恐らく――

「受難の死をイエスから聞き及んで」

と書いてます。聞いたのでしょうね、ここは小池の思いですから。十字架の受難の死をイエスから聞き及んでは、モーセもエリヤも本当に心から崇敬して、もう言葉を失ったんだろうというようなことを書いてます。

「復活、昇天のイエスの旺盛なる霊生をイエスから承り、讃嘆の意を表したであろう。」

と。もう言葉にはならない。十字架にかかるということは本当に預言者たちにとっても、もう言葉にならないほどの思いであった。これは聖書には書いてないけれども、エリヤとモーセとイエスとの語らいの内容は恐らくこんなものであったろう。イエスに出会って、モーセもエリヤも本当に讃美をしたのだろうということをここで書いてくれてます。

何回も言いますけれども、非常に

「旺盛なる霊生」

なんです。「旺んなる生命」ということを小池辰雄は書いてくれている。本当に小池は旺なる生命だと思っている。イエスの生命というのは本当に旺んなる旺盛なる生命だと思っているから、ここで何回も繰り返して、

「旺んなる生命をどうしてくれるんだ」

というようなことを書いている。だから、小池は物凄く十字架の体験を本当に心から受けとっている。そうでないとこういう表現はできないと思います。

●復活の予表

《イエスが変貌してモーセ及びエリヤと語っていたときの天国的な情景は正に第四次元的なものであった。その後のゲッセマネの祈りのときのように、この場合も弟子たちは睡気に襲われたが、やっと目覚めたら、栄光にみなぎる光景に瞠目したが、彼らの会話の内容はわからなかった。ペテロが例の如く差出て、とんちんかんな提言をした。すなわち、イエス、モーセ、エリヤのために三つのいおりを造ろうというのである。カイロス（時期）をわきまえないこんな提言はイエスにとって笑止の沙汰であった。

見よ、霊雲燦然と捲き起こり、彼らを包んだ。すると光雲の中から声がひびいてきた。

「これはわが愛しむ子、わが悦ぶ者である。おまえたちこれに聴け！」

ヨルダンにおけるイエスのバプテスマに際してひびいて来た天来のみ声と同じ内容のものである。弟子たちはみ声の下に倒れ伏した。しばらくして目をあげたが、もうイエスの他何者も見えなかった。イエスの変貌は言うまでもなく、復活のイエスの予表である。が、信頼されていた弟子たちすらもそれを予見することができなかった。だから、イエスが復活したとき彼らはみな、あやしみ、うろたえ、うたがいもした。》

これは弟子たち三人が共通して体験している。この変貌のところを、天国的な情景を本

当に三人は体験しているけれども、そういう異現象に出会ってオロオロしているばかりで、彼らは恐らくエリヤとモーセとイエスの言葉なんかを聞いているけれども、何のことかさっぱり分からなかったんですよ。

「十字架にかかるよ、復活するよ」

というようなことを語られたのだろうけれども、弟子たちは何のことかサッパリ分からない。ただその現象に圧倒されてオロオロしているばかりなんです。だから、ペテロがとんちんかんなことを言う。

「三つついおりを造りましょう」

とか、福音書とは関係のないような、とんちんかんなことを言って、これを「笑止の沙汰」と書いてますけれども、何も分からないんですね。弟子たちはこういう体験をしていながら、本当に何も分っていない。それが弟子たちだった。それがまた我々の姿と一緒です。そして、雲が湧いて、

「霊雲燦然と捲き起こり、彼らを包んだ。すると光雲の中から声がひびいてきた。

「これはわが愛しむ子、わが悦ぶ者である。おまえたちこれに聴け！」

ヨルダンにおけるイエスのバプテスマに際してひびいて来た天来のみ声と同じ内容のものである。」

「これはわが愛しむ子、わが悦ぶ者である。おまえたちこれに聴け！」

と。こういう言葉が発せられたということが記事にちゃんと残っていることですから、ペテロたちはちゃんとこれを聞いている。けれども、聞いていても――もう右から左ですよ――何も心に残っていないというようなことです。ここに、

「弟子たちはみ声の下に倒れ伏した」

と書いてある。黙示録のところにも、そういう輝くイエスに出会った時に、倒れて平伏しています。この時もそういう現象に遭った時にこの弟子たちも倒れている。ところが、黙示録に書いてあるように、

「懼れるな」

というふうに物凄い優しい言葉で語りかけるんです、そのあとに。それでヨハネ黙示録のヨハネもそういうことは凄いことだったということを、あとになって気づくんです。その時は分からないんですよ、もう恐ろしくてね。我々もそういう異現象に出会った時は、恐ろしくて何のことだか分からないで、きっと倒れ伏してしまうんですよ。この時も、

「弟子たちはみ声の下に倒れ伏した」

と書いてある。ヨハネの黙示録もそうでした。そういう異現象に遭った時には本当に倒れ伏してしまう。けれども、イエスにとっては、愛しい人ですから必ず「恐れるな」といって、優しく迎えてもらえる。そこが、光輝に輝いている恐ろしい姿でありながら、物凄い愛情がその中に含まれているということです。

「イエスの変貌は言うまでもなく、復活のイエスの予表である。」と書いてます。

「復活する姿をあらかじめ表してくれているんですよ」

ということを言うけれども、弟子たちにとって、それが復活ということはとんでもないことで、さっきも言ったように、もう「死ぬ」ということだけでグサリときて、「復活する」という言葉は全然頭には入っていないということで、この弟子たちは

「イエスの変貌が復活の予表である」

ということを、体験しながら全然分っていないということなんです。

「信頼されていた弟子たちすらもそれを予見することができなかった。だから、イエスが復活したとき彼らはみな、あやしみ、うろたえ、うたがいもした。」

そういう現象を見ても、もう本当に何のことだかサッパリ分からないというようなことです。全然分っていない。

「イエスは、復活するよということを三回言われた」

と、どこかに書いてますけれども、何回言われても、御霊によって教えられなかったら絶対に分からない。御霊によって神さまの深みまで本当に分かるには、やっぱり十字架を通って、復活したキリストからの霊生が我々の心を鍛えてくれなかったら、とてもこういうことは分からない。そういう現象に出会っても決して分からない。オロオロするばっかりだということです。これが人間の姿ですね。我々の姿でもありますよ。我々はこうやって語っていますけれども、もしそういう異現象に出会ったとしても、おそらく我々は全然理解できないのではないかと思います。

《おもうに、イエスの変貌は、実はキリストの天的な本然の原姿が現じたというものである。地上のイエスは実は天的キリストのかくれた姿であった、というものである。第二イザヤが伝えた「隠れて在ます神」（Deus absconditus）（イザヤ45・15）は、キリストの受肉をもって、地上に自顕したともいえるわけであった。イエスはその意味で啓示の神（Deus revelatus）であったが、あらわれた受肉のキリストは、自らを顕わししつつ、隠れていた。それは人間どもが、弟子たちすらも、イエスにおいて神が啓示されていることに躓いたことがこれを裏書きする。ペテロが、さきにも見たように、

「あなたは活ける神の子、キリストであられる」

と告白したとき、隠れたる神をイエスにおいて見た。これは瞬間的にみたまの光を受けての告白であった。しかし、イエスは、その意味で隠れたる神の表現体であると同時に、弱き人間の姿をもっていたから、隠されていた躓きの存在であった。人間どもの躓きの極てが十字架という帰結をもたらした。そして今でもイエスの十字架そのものが躓きで、歴史の終末にまで至る。

変貌のイエスこそ、本然のキリスト、復活のイエス、霊生旺んなるイエス、われら

の希望の実体であった。》

この最後のところが非常に重要なことです。

「おもうに、イエスの変貌は、実はキリストの天的な本然（ほんぜん）の原姿が現じたというものである。」

と。この「変貌」という言葉は、始めに言いましたように、特殊な現象がここに書いてある。何遍も言いますように、イエスの人間としての姿は非常に惨めなものです。けれども本来は、本来の姿の一部がこの輝けるイエスの姿なんです。だからここで、

「地上のイエスは実は天的キリストのかくれた姿であった」

と書いてます。隠された、「隠れて在（い）ます神」ということをイザヤ書から引用していますけれども、イエスを見た時に、

「この人の中に神さまが居る」

ということに全然気がつかない。ほとんどの人は気がつかない。ペテロも

「あなたは活ける神の子です」

と言ったのも瞬間的に分っただけです。キリストの姿も人間の姿ですよ。そこに輝ける神の姿なんて、とても誰もよく見ない。そして、変貌された姿をペテロも見せてもらいながら、それでもまだ分っていない。これが人間性なんですよ。

「あらわれた受肉のキリストは、自らを顕（あらわ）しつつ、隠れていた。」

ということでしょ。それだから、イエスというのは本当に躓きの人です。あの惨めなイエスの姿の反面、本来の姿だったら輝いているイエスの姿なんです。それを弟子たちが見せてもらっているのに、この輝くイエスの神の姿のことが分っていない。だから、瞬間的には御霊で、「これは神の子だ」ということが分っても、本来のこういう輝ける神の姿のことが分からない。

●大希望の実体

だから、最後に結論として小池は書いている。

「変貌のイエスこそ、本然のキリスト、復活のイエス、霊生旺（さか）んなるイエス、われらの希望の実体である。」

と。「希望の実体」なんです。これが大希望なんです。我々は日常生活を営んでいくときに、こんな変貌の姿なんてほとんど想像しないでしょ。けれども、実際に我々があっちの世界に行ったときは、変貌した姿のような輝けるイエスに抱かれるんですよ。そのイエスに会うんです。だから、イエスだけが復活されたのではない。

「我々も復活させられる」

と書いてある。

「我々の姿も復活して変貌していく」

ということが書いてます。我々の希望は、こういう輝くイエスの姿に変貌させられていく。ここで「希望の実体」と書いてますでしょ、「大希望の実体」なんです。

「われらの大希望の実体」

なんです。我々はここまでで死んでしまうわけではない。死んでしまって朽ちるわけではない。死んだあと、復活して、復活の体に我々は変えられていく大希望がある。それが「永遠の生命」とかいわれているものだと思う。

けれども、我々はそれを想像さえできませんよ、復活体というものはどういうものか。輝いているイエスとはどういうものか、体験したことがないですもの。死んだこともないでしょ。死んだ体験もなければ、復活なんて聖書に書いてあるだけで、復活の実体なんて全然わからないですよ。まして、変貌している姿なんて想像さえできない。けれども、ここで小池辰雄が書いているように、

「これは隠れている神さまであって、大希望の復活なんです。大希望の永遠の生命です。それが皆さんに約束されているんですよ」

ということをここで小池の体験から書いてくれている。我々がこの地上で「ああだ、こうだ」と何かぐずぐずして生きているのが我々の姿ではないですか。しかし実際は、

「イエスにあったら、こういう大希望の中に我々は入れられている」

ということを、ここで最後に小池辰雄は書いてくれている。だから、

「地上のイエスは実は天的キリストのかくれた姿であった。」

という。私たちは「かくれた姿」しか見ていない。「地上のイエス」しか見ていない。だから、この変貌の記事というのは非常に大切なんです。聖書の中で変貌の記事があるということは非常に大切なことです。「復活した」ということの記事が書いてありますけれども、「輝ける姿」のことは書いてない。「復活した」ということは書いてます。「お魚を食べた」とかいろんなことが書いてありますけれども、「輝ける姿」ということはこの変貌の記事の所にしかない。だから、これは非常に特殊な記事なのだなと私は感じる。これがなかったら、

「隠れたる神、二面性を持った神」

ということが分からない。これを「信ずるか、信じないか」は、人それぞれですよ。けれども、聖書に書いてあるこの記事はやはり、信ずるに足るものなんです。私たちは徹底的に神さまを信じたら、これは全部信じるべきなんです。そうでないと、我々の信仰というものは半分しかない。復活まで信じないと、我々の物凄い大希望の、

「我々が復活されて死なない生命を賜る」

ということまで本当に徹底して信じないと、これは物凄い――ウソになるというか――不完全ですよね。そこまで徹底して信じないと、大希望とはいえない。このキリストの

「十字架と復活と昇天それから霊降」

とかありますでしょ。それは本当に大希望の中に我々は入れられているということでしょ。

だから、小池辰雄は、

「私が死んでも、泣いてくれるな」

とか言ったそうですけれども、実際に大希望の中に小池は死んだと思います。そういう希望を持って死んだ。だから、ここに小池がいろいろ書いているのは、本当に真実ですよ。そういうことを小池は生きて、我々に語ってくれたんだと思います。パウロの言葉に、

「主は豊かであったのに、あなた方のために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなた方が豊かになるためである。」

と、控えめに言ってますけれども、これは本当に惨めな姿でイエスは来られたけれども、小池が言うように、

「大希望の中にあなた方は入れられる。それは主の貧しさによって、あなた方が豊かになるためである。」

ということをパウロが、この大希望の中に我々は生きているんだということを言っている。

●啓示の神

ここに、「啓示の神」ということを書いている。これは、

「神さまから、上からきた啓示でないと我々は分からないんだ」

ということです。だから、小池は「啓示、啓示」という言葉を非常に繰り返して言ってます。「啓示の神」なんですね。啓示されないと我々は絶対に分からない。御霊によって啓示される。「啓示」というのは何か現象ではない。

「御霊によって我々は教えられる」

というのが啓示です。コリント第一の1章に、

「御霊によって神の究極の深みまで分かる。それは啓示によって分かるのだ」

とあります。小池辰雄はこういう変貌の所でやはり啓示を受けてこれだけのことを書かれたと思う。その大希望の中に小池は生きたから、こういう書物を残されて語られたのだ思う。小池から学ぶものはやはり非常に深いところがあります。私はそれを最近やはり非常に感じます。特に今回、この「変貌」という所を読んで、小池の十字架の受けとり方の深みを非常に感じました。

他のキリスト教会なんかに私は顔を出すと言いましたけれども、ここまではっきりと

「大希望に生きるんですよ」

とかいうことは言ってくれないですよ。ペンテコステとか復活節とかありますけれども、この小池が言うような、

「本当に死んでも死なない生命」

というところまではなかなか皆さん、普通の教会でも言ってくれない。何か日常生活の延長みたいなところでしか言ってないような気がします。

小池辰雄はそれだけ本当に稀有（けう）な人ですよ、これだけ神さまから啓示されて。パウロはもちろんその通りです。パウロはそこまで知っていた。

「第三の天まで上げられた」

と言っている。物凄い輝ける世界に生きていて、パウロなんかはそれを見ていると思う。

小池辰雄も、パウロまではいかないけれども、非常に深いところまで啓示されていたと思う。だから、こういうふうに書けるんです。そこを私は、「小池辰雄は凄いな」と思って、もう一度これを学びたいという思いがある。どこをとってみても、小池の言葉の端々にそれが出てます。

この『無者キリスト』というのは読みにくい本ですよ。けれども、これを人に知ってもらうためには、我々が小池辰雄と同じような体験くらいまではやはり学んでいかないと、なかなかそこまで人に喜んで伝えることはできないだろうと、私は思っている。難しいですよ、これはやっぱり分からないですよ。これを分かろうと思ったら、やはり我々がキリストの御霊をもらわないと、これは読めないかも知れませんね。

まぁそういうことで今日は――私はここを読んでいて感動した。最後の所を読んでいて、本当に私は感動しました――ということで終りたいと思います。……

私は他の教会にも顔を出していたけれども、結局、みんな

「十字架が分からない」

と言う。分からない人が多いんです。「罪からの解放」とか言いますよね。

「贖罪死というのは罪からの解放です」

というようなことを言ってますけれども。「罪」というのは日本人には分りにくいんですよ、非常に。ただ、小池辰雄は

「自我が、自己主張がわるい」

というようなことを他に書いてますでしょ。あれを読んで私は、

「ああそうだ。私は自我から解放されたんだ。自我から解放された。これが喜びの源泉なんだな」

と私は思いました。「罪」とか思わないんです、私は。日本人はあまり「罪、罪」とか言わない。ただ「自我から解放された」という喜びは、最近非常に分かるんですよ。

「ああ、子供みたいにされた。もう自分のことは考えなくていいんだ」

ということを感じる。それを「自我からの解放」と小池辰雄が書いてくれているように、

「私は自我から解放されたんだ」

というその喜びが非常にあるから、そういうことをちょっと言ったけれども。苦しんでいるのは、日本人はやはり「自我」なんですよ。

「『自分が、自分が』ということから解放されたい」

とみな思っているんですよ。「贖罪死」というのは、その「自我からの解放」だったんです、

私にとっては。それが非常に大きなことで、それが物凄い喜びなんです。本当にその通りなんです、私は。それが70歳位になったときに初めて、

「ああ、自我から解放された」

という――その時は分からなかったけれども――最近になって、

「あっ、これが自我から解放されたことなんだ」

ということがようやく分かるようになった。そういうことです。それは楽ですよ、「自我からの解放」というのは。こんな楽なことはないんですよ。自我からの解放というのは自分の力ではない。自分の力では、自我からの解放なんてできない。これはやっぱり「贖罪死」ということの本質なんですね、私にとっては。だから、皆さんに、何とかこの「自我からの解放」をしてほしいなと思う。それが喜びの源泉だと思う。そうすると、

「自分の十字架を負いて我について来い」

とか、ああいうのも、もうどうでもいいということになる。もうそんなことは当たり前だなと思う。それを全部、キリストが負ってくださったのだから、もう自分は何もする必要がはないんですよ。

「喜んでいたらいいんだ」

と、私は最近そう思います。今日は学んだことが多いんですよ、私はこの「変貌」の所を読んでいて。

「ああ、凄いことを小池が教えてくれているんだな」

と。やっぱり、

「幸いなるかな、心の貧しき者よ」

ですよ。

「心の貧しいということは、徹底的にキリストによって貧しくされている」

ということを小池が言っているでしょ。貧しくされたら、向こうから全部入ってくる。向こうから教えてもらっている。自分が「勉強して分った」とかいうことでは絶対にない。私は勉強なんかあまりしない方ですから、余計それが分ります、研究なんかしないから。全部向こうから教えてもらう。それが難しい言葉でいったら、「啓示」ということです。

そんな難しい言葉は――これは「業界用語」という――キリスト教界の業界用語ですよ、「啓示」とかは。私は「伝道」という言葉も業界用語ではないかなと思う。「そんなのとは違いますよ」と私は言いたい。確かに「伝道」とか「宣教」とか書いてますよ。その他に言葉がないから、そういうように言っているけれども。実際は、

「神さまからもらったものを喜んでいる」

ということが、「伝える」ということだと私は思っている。

小池辰雄ほどに、十字架をはっきりと受けとっている教会も少ないのではないかと思う。確かに、喜んでいるんですよ、皆。そういう教会に行っても、喜んでいるけれども、何か

表面的な喜びかなとか思ったりもしますので、本当に心から喜んでほしいなと思いますね。

小池辰雄はここには「大希望」とは書いてないけれども、どこかで「大希望」というような言葉を使っていますね。

〔註：第三巻『無の神学』／P.72「そしてヨハネを護り、世の終末の啓示を天界から、パトモス島のヨハネに示し、大希望のおとずれを与えたわけであった。」／P.210「黙示録が啓示している象徴的な歴史の終末と、終末の新天新地の大希望、大現実を聖霊の光の中で霊視しているか」〕

物凄い希望なんです。もう想像できない希望です。本当に想像できない。死んだこともなければ、復活に出会ったこともないでしょ、みんな。私たちは復活に出会ったこともない。聖書に書いてある通りをただ信じるということで、想像できないんです、神さまの世界なんて。想像はできない。ただそれを「ああ、そうですか」と受けとるだけなんです。

キリストを信じない人、キリスト教会以外の人は、自分の力で全部やろうとする。全部自分の力でやろうとする。苦しいですよ、自分の力で全部やろうとしたら。特に自我の問題は、それから解放されるというようなことは、自分の力でできるわけがない。そういうことが絶対わからない。だけど、神さまを信じない人は、地上の知恵で、人間の知恵でやろうとする。ところが、人間の知恵はそこまでいかない。自我の解放まではいかない。絶対にいかない。それを憐れんだのが神さまで、我々のために死んでくださったというところに憐れみがある。だから、十字架というのは物凄く大切なことなんです。小池辰雄は、

「十字架によって徹底的に自分は無にされた」

と言ったでしょ。そういうことを言ってますよね、

「無をもらった。神さまの無をもらった。何も無いものをもらった」

ということを言っている。小池から学ぶものは多いですよ、やっぱり凄いですよ。……

それは浅瀬でバシャバシャやっているようなもので、私も77歳までわからなかった。それは本当に「門前の小僧」でした。言葉は分っているんですよ、何回も聞いているから、言葉は分っているけれども。それが「門前の小僧」で、言葉だけがわかっているだけのはなしで、本質は全然分っていなかった。それが70歳を過ぎた頃から――いつだかわからないです――突然にわかった。けれども、これは誰にでも起きることですよ。誰にでもこれはありうることなんです。私は全然、特殊な人間ではない。私はそんな霊的なものは全然ない人間でしょ。全然そんな霊的なものは何もない。だから、普通の人間が変わるわけですね。不思議ですね。私は年とって、

「こんな幸せなものはないなぁ。こんな幸せな人生はないな」

と、自分でいつも思っています。私は何も他のことはないんですよ。ただで下さいますよ、本当に。では、終ります。